

人間―この中間的なもの―

朝
倉
哲
夫

目 次

はじめに

- (I) \wedge ニヒリズム \vee と \wedge エゴイズム \vee による非人間化の問題
- (II) 人間は「中間的存在者」であるということ
- (III) 「中間性」としての人間性ということ
- (IV) 「中間性」としての人間性ということ
おわりに

はじめに

△ニヒリズム▽と△エゴイズム▽の虜となつてゐる現代人は、生々として生きる喜びや力を喪失してゐる。△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽の生き方を克服して、生きる喜びと元気を取り戻すためにはどうすればよいのであろうか。そのためには、端的にいつて、この宇宙における人間の位置づけがもともと、「中間的存在者」であるということ着想して、それに即した生き方をする他はあるまい。「中間的存在者」として、人間は人間を超えた「大いなるもの」によつて生かされ、支えられてゐるという事実に関眼するとき、私たちは本当の意味においての生きる喜びと元気を取り戻すことであらう。

人間は狼に育てられると狼になるという。二十世紀の初頭、アマラとカマラという二人の乳児が狼にさらわれ、数年を経て発見された時には完全に狼になつていたという。インドにおいて起つた悲劇である。しかしこの悲劇は、私たちに對して、人間とは何んとも可塑性が大きい存在かということを改めて教えるものであらう。(動物は、その点、種の性質を失うことは全くない。人間に飼われても、犬はあくまでも犬であり、猫はあくまでも猫である。)とするなら、人間は常に神・佛を念じてゐるなら、人間といえども限りなく神・佛に近づきうるものといえることなのではなからうか。否！佛教においては佛になれるのである。神への祈りとか、お念佛の意義はまさしくその点にあらうと思われる。

このように人間が、神への祈りやお念佛などによつて、神・佛に限りなく近づきうるものであると同時に、逆に狼に育てられると狼にもなりうるということは、人間という存在がもともと神佛と動物との中間に位置づけられてゐるということをも端的に意味するものであらう。人間はまさしく「中間的存在者」なのである。そして人間の謎も、人間の不思議さも、この「中間的存在者」ということに直截的に起因するといいえよう。しかし、今日に生きる私たちは、

人間のこのような位置づけを改めて問うことはない。それどころか、傲慢にも、人間は宇宙の主人公であり、自然の支配者であると思いつているのである。そして神・佛などという陳腐なものがなくとも、人間は人間だけでも十分にやっつけていけるという人間主義の信念にこりかたまってているのである。この人間主義の信念！この信念を植えつけたのは、まさしく、近代であった。そしてわが国もまた、敗戦後の半世紀、この信念でやってきた。その結果、わが国にも「人間主義」がはびこり、それが却って、人間を「非人間化」するという極めて矛盾したアイロニーを招いているのである。

周知のように、「古代は自然を発見し、中世は神を発見し、近代は人間を発見した」といわれる。それでは近代が「人間」を発見し、「人間主義」の時代を築くためにはどのような手立てを考案する必要があったのだろうか。そのためには①何よりも先ず、「神」を追放すること。そして②その後釜に人間を据えること。更に③この人間をして「自然」の主人公にすること。このような三つの手順が必要不可欠なことではなかったか、と思われる。

「神は死んだ。」（ニーチェ）

「宗教は阿片である。」（マルクス）

「神とは、人間の理想の姿を投影したものである。」（フョイエルバッハ）

「人間は自然の主人公である。」（デカルト）

このような一連の近代哲学者の言葉は、近代が「人間」を発見すると共に、人間主義という△ヒューマニズム▽の時代を創出するための一大モニュメントであったといえよう。近代は、理論的には、このような手順を踏んで序々に「脱宗教化」し、やがて「世俗化」の滔々たる時代潮流を定着させたのである。その結果は一体どうなったのであるか。端的にいつて、「神」を追放したことは△ニヒリズム▽を招来したと同時に、また近代的個的人間を解放したこ

とは△エゴイズム▽を生み出したといえよう。加うるに、この△ニヒリズム▽と△エゴイズム▽は、人間を「非人間化」するという極めて矛盾したアイロニツクな現象を結果したのでもある。こうしたことを、私たちは決して忘れてはならない。

ところで、近代西欧におけるこのような「脱宗教化」、「世俗化」の流れは、敗戦後のわが国においてもまたミニ再生産されているのではないか、と疑われる。

戦前におけるわが国が、すなわち「大日本帝国」の性格が、政治学上にいういわゆる「中性国家」ではなく、国家主権が「精神的権威」と並びに「政治的権力」とを一元的に占有していた点にその特色があったことは周知のことであろう。そこでは、かつての日本人は「古今東西を通じて常に真・善・美の極致」とされた「国体」に依存し、またそれに帰一して生きていく以外には生きるすべがなかったのである。しかし、その半面、この「国体」に帰一して生きていく限りは、生きるということについて特別にその意味づけを考える必要は全くなかったのである。それ故に、戦前、戦中の日本人は安心して「国体」に身心をまかせておけばよかったのであり、「国体」という「全体精神」の一分肢として生きていられたのであった。

ところが、昭和二十年の敗戦はこうした超国家主義から日本人を解放したのである。いま、エーリッヒ・フロムに従い、個性化の過程において、個人が完全に解放される前に存在する絆を「第一次的絆」と呼ぶならば、まさに敗戦は日本人をして第一次的絆であった「国体」から解放したのである。日本人は個人として解放され、自由を獲得したのであった。だが、このことは同時に、かつて自己の生活に「意味」と「安定」とを与えていた「国体」という絆から解放されて、却って日本人をして「孤独」と「不安」の中につき落とすという極めてアイロニツクな現象を生んだのである。その結果、私たち日本人は生きる目標や方向性は勿論のこと、人生の意義や行為の基準などについてもひ

どい混乱を引き起し、混迷のただなかで遂に「さまよえる日本人」となってしまったのである。それ以後、戦後半世紀を経た今日に至るまで、こうした「精神的空白化」の問題は未だに本質的には埋められていないように思われる。△ニヒリズム▽の社会的風潮が横溢している所以である。とはいえ、こうした「精神的空白化」の問題は、たとえ一時的のぎであるにせよ、何らかのものによって埋められる必要があるだろう。そこで、戦中の「国体」に対する穴埋めとして登場してきたものが、戦後新たに民主主義の名の下に解放されたところの「欲望的自我」という存在なのであり、この「欲望的自我」の欲望の充足ということによって、私たちは精神的空白化の問題をまぎらそうとしたのである。換言するなら、私たちは戦中における「滅私奉公型の生き方」から、「私の欲望」、「私の生活」を第一の主眼とする「滅公奉私型の生き方」へと百八十度の大転換をしたといえよう。しかも、このような観点から民主主義をば、誰でもが、自分の欲望に従って思いのままに「私の利益」、「私の財産」を追求することができ、勝手気儘な「私の自由」が許されるものと誤解してしまったフシがあるのである。そこに、戦後日本における民主主義が、「私の欲望」を中心とする「欲望型の民主主義」とならざるをえなかった大きな原因があったといえよう。△エゴイズム▽の生き方と、その社会的風潮が横溢せざるをえない所以である。

以上においてみてきたように、近代史における「神」の追放と「脱宗教化」や「世俗化」の問題、また、近代的自我の解放という流れは、戦後のわが国における「国体」（その中心には現人神としての天皇がいた）の解体による「脱宗教化」と「世俗化」、並びに欲望的私的人間の解放という流れと極めて類似しているといえることではなからうか。というのも、この両者の流れにおいては「神」とか「国体」という「大いなるもの」が追放されて、「個的人間」が歴史の全面に大きく登場すると同時に、「人間主義」の時代が形成され、しかもこの「人間主義」が、人間を非人間化するという極めて深刻なアイロニクな状況を招いていたからである。それが△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽という現象

なのである。それでは何故に、 \wedge ニヒリズム \vee や \wedge エゴイズム \vee は人間の非人間化現象を招来するのであろうか。そのことを次節において考えておこう。

(I) \wedge ニヒリズム \vee と \wedge エゴイズム \vee による非人間化の問題

「人間主義」とは、端的にいえば、「人間の、人間による、人間のためのものの見方、考え方、生き方」のことであるといえよう。近代は、そしてまた戦後のわが国は、このような「人間主義」を生み出した。しかもこの「人間主義」は、人間を非人間化するところの \wedge ニヒリズム \vee や \wedge エゴイズム \vee の生き方を招来すると同時に、人間から生きる喜びを奪い去り、心を空虚化し、自分勝手な欲望中心の生き方を横行させているのである。何故であらうか。

① \wedge ニヒリズム \vee による非人間化の問題

\wedge ニヒリズム \vee （虚無主義）とは、端的にいえば、次のような二つの要素から成るものである。

その一つは、この人生には究極的に存在するものは何もないという「存在のニヒリズム」であり、いま一つは、この人生には絶対的価値は何もないという「価値のニヒリズム」である。

先ず前者の「存在のニヒリズム」ということからいえば、それは、この人生には神・佛というような究極的な存在は何もないということなのであるから、必然的に生きる方向性や目標が見失われざるをえないということを意味しよう。そうなると私たちは、どう生きたらよいか、どう生きるべきかということが全く分からなくなるところから、生きる元気を喪失すると同時に、生きる喜びも感じられなくなってしまうのである。人生に対する無目的、無関心、無感動というようにいわれる「三無主義」の生き方はその典型といえよう。しかも、このような人生に対する「三無主義」は、逆に却って、「お金」や「モノ」こそが人生の目的であるとする「拝金主義」や「唯物論」^{ただものろん}を横行させる原因

となつてゐるということを、私たちは忘れてはならない。最近のわが国の世相や諸々の事件にみるあまりにも浅ましい非人間的な生き方の数々は、端的に、このことを物語つていよう。

このように、私たちはこの人生における究極的な存在を見失う時、生きる方向性や目標が全く分からなくなるままに、その代償行為として享楽主義や刹那主義に身を任かせるようになるのである。「お金」や「モノ」や「セックス」や「グルメ」などを求めてのいわゆる「異生羝羊心」を中心とする唯物的な生き方の横行。（羝羊とは、雄の羊のことをいうのであるが、雄の羊は食と性とを求めてあくせくと生きているという。そのような生き方をするのを異生羝羊心の生き方というのである）しかも、こうしたことによつて却つて、心はますます砂漠化してカラカラに干涸びてしまうのである。そこから感性もみずみずしさを失うと同時に、ただ刺激のみが人々を動かすようになるのである。人間性の喪失の極みといえよう。これでは、生きる喜びも元氣も湧いてこないのも当然であろう。

次に、後者の「価値のニヒリズム」についていえば、これは、この人生には絶対的な価値は何もないということである。すべては相対的価値でしかないということなのである。近頃、価値の多様化などと如何にも気のきいた小賢しいことがいわれるが、これもすべては相対的価値でしかないということをいつているだけであつて、むしろ「価値のニヒリズム」ということを隠す悪質なものといえよう。

それでは、この人生には絶対的価値は何もないということになれば、一体どうなるであろうか。その時には、各人がそれぞれによいと思つたこと、好ましいと感じたことが価値あることとならざるをえないであろう。そこから、他人さまに迷惑をかけさえしなければ何をしてもよいという、最低のルールが生じてくるのである。価値の多様化ということは、端的に、そのことを承認するものといえよう。現代のわが国に百鬼夜行の現象が横行するのもそのためであろう。しかも最近では、「他人さまに迷惑をかけなければ」という最低のルールでさえも、次第に守られなくなりつ

つあるのではないか、と深く憂うるのである。

以上においてみたように、「人間主義」が必然的に \wedge ニヒリズム \vee による人間の「非人間化」というアイロニツクな現象を招来するということを、私たちは決して忘れてはならない。それでは次に、 \wedge エゴイズム \vee によるそれと同じ問題を考えるとしよう。

㊦ \wedge エゴイズム \vee による非人間化の問題

今日の私たちのあり方・生き方は、社会学的には、「受容指向型」のそれであるといわれる。自分からは進んで社会や他者のためになることを何もしようとしないのに、逆に社会や他者からは何かをしてほしいと願う、そんな生き方をしているというのである。それは、戦後のわが国における「滅公奉私」の生き方と、端的に、重なり合うものといえよう。ともあれ現代のわが国には、「受容指向型」とも「滅公奉私型」ともいえる自分中心の \wedge エゴイズム \vee の生き方が横行していることを忘れてはなるまい。

\wedge エゴイズム \vee とは、「自分」という「自我存在」を中心とするものの見方、考え方、生き方のことをいう。ところで自分というエゴ存在は、「自らを他から分ける」という働きをするものとして、他者との間柄を端的に拒否するものといえよう。人間とは、文字通りに、人と人との間柄に生きるものという意味であろう。しかし、自分という「エゴ存在」はまさしくこのような人間本来のあり方を徹底的に破壊するのである。とするなら、このような自分を中心として他者との間柄を拒否する生き方からは、本当の意味における生きる喜びは決して湧いてこないであろうし、むしろ逆に、自分に対する嫌悪感が生じてこざるをえないであろう。というのも、本当の意味における生きる喜びや生きる力は、社会のため、他者のために何かの役に立っているということが実感されるとき、心の底からしみじみと湧き上ってくるものといえるからである。

このように、自分を中心とする生き方は、自分に対する嫌悪感を生じさせるのに対して、他者に対する慈悲や施しの生き方は、逆に却って、自己祝福感を生じさせるという逆説に改めて注目する必要がある。というのも、それは、生命のつながりということの大事さを端的に教えるものであるからである。

私たちの個々の生命は、いわば大生命という「如の世界」から如来させられたものとして、他者の生命と共に、この大生命によって生かされて生きているものといえよう。それ故に私たちの生命は、個々別々でありながら、しかも決して切り離すことはできないという関係にあるものなのである。それが生命の連帯性ということに他ならない。とするなら、この生命の連帯性を破るところの自分中心的な生き方は、私たちに對して自分への嫌悪感を抱かせざるをえないであろう。それとは逆に、生命の連帯性を促進するところの利他的な生き方は、私たちに対して限らない自己祝福感を与えるものとなる。それ故に私たちは、この自分中心的な生き方を克服することが、本当の意味における生きる喜びを感じさせると同時に、元氣を生み出す根源ともなうと考えるのである。そのための手段として、私は次のようなことの実践をすすめたいと思う。

(ア) いつも柔和で笑顔を絶やさないうこと。オンニコニコ薩婆詞そわわでいるということ。このことが相手の心に限りない喜びを与えるからである。

(イ) アリガトウの一言を忘れないこと。この一言が相手の心に限りない喜びを与えるからである。

(ウ) 相手の状態を察知して、相手を思いやる配慮や気配りをする。このことが相手の心に限りない喜びを与えるからである。

(エ) 身体を使って他者のためになるようなことをすること。このことが相手の心に限りない喜びを与えるからである。こうしたことの実践が、 \wedge エゴイズム \vee の生き方をコントロールするために極めて重大であろうと考えるのである。

以上において私たちは、「人間主義」が、この人生における究極にあるものを忘却させると同時に、また絶対的価値を否定したことが、逆に却って、 \wedge ニヒリズム \vee や \wedge エゴイズム \vee の生き方を生み出し、それがまた人間を非人間化するというアイロニーを招いていることを注視してきた。それは、人間の本来のあり方が「中間的存在者」であるということをしつかり忘却し、神・佛というような「大いなるもの」を追放して、人間は、「人間主義」で十分にやっていけると錯覚したことに起因するであろう。とするなら、このアイロニーを克服するためには、人間は「中間的存在者」であり、人間性は「中間性」であるということを変更して想起して、人間の位置づけにふさわしい「謙虚さ」を取り戻すと共に、「間柄」に生きることの大切さを認識することが大事となろうと考えるのである。それでは次節において、人間が「中間的存在者」であるということの意味を改めて考えておきたい。

(II) 人間は「中間的存在者」であるということ

私たちは日頃、私たちは人間であるので人間のことは一番よく分かっていると信じて疑わない。果してそうか。むしろ人間は、人間にとって永遠の謎なのではなからうか。

人間は「形而上的動物」といわれる如く、単に「あること」（『事実』）のみの追求だけでは決して満足しうるものなのではなく、必ず「あるべきこと」（『理想』とか、理念とか、価値などということ）を追い求めずにはいられない存在なのである。人間は「動物」であるにも拘らず、他方では「理想」とか、「理念」とか、「価値」とかというような「形而上的なもの」を追求せずにはいられないとは、一体どのような存在なのであろうか。このような人間は一方では、「真・善・美・聖」というような崇高な価値や理念などを追求せずにはいられない「叡智的存在者」といえるのに対して、他方ではまた、何故に殺人獣、殺生獣ともいえるような「獣」以下の残忍非道な存在なのでもあろうか。人間とは、何故

に、このような全く矛盾したアンビバレントな存在なのであろうか。端的にいつて、それは人間が「神・佛」と「動物」との中間に位する「中間的存在者」であるからだといえよう。

この宇宙における人間の位置づけは、正直にいつて、空間的にも時間的にも「中間的存在者」というのが、最も妥当な位置づけなのではないか、と思われる。

先ず空間的にみた場合、佛教においてはその十界説（佛界・菩薩界・緣覺界・聲聞界・天人界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界）の中において、佛界から数えて下へ五番目、地獄界から数えて上へ五番目という中間に、「天人界、人間界」が位置づけられていたということ。またキリスト教においても、人間は、「神の像」が与えられた存在として、端的に「神」と動物との中間に位するものとされていたということ。

それでは次に、時間的にみた場合はどうかであらうか。

朝は神 昼は人間 夕されば

獣に近き心かなしも（真溪涙骨）

という歌がある。真溪涙骨という人が、いつ頃の人でどんな人であるか私は知らない。しかし、この歌はいかにも見事に、人間が時間的次元においてもまた「中間的存在者」であるということを端的に示唆していよう。人間は一日のうちにおいても、朝は神のようであり、昼は人間であり、夕方にはそれこそ獣のようになるという。自分の一日を反省するとき、思わず微笑を禁じえないではないか。余談ではあるが、「佛」とは、「真理に目覚めた人」のことをいう。人間は朝、生きていれば必ず目覚めるのであるから、その辺のことを勘案して、

朝は佛 昼は人間 夕されば

獣に近き心かなしも

とするならば、この歌は更に一段と面白くなるのではないか、と思われる。

佛教においては、周知のように、「三世」ということがいわれる。「過去世、現在世、未来世」ということである。その場合、「現在世」という「中間的世界」に生きる私たちは、「現在世」が「諸行無常」、「世間虚仮」という「四苦八苦」の世界であるということを知っている。が、しかし私はまだ不明にして、「過去世」のことも「未来世」のことも全く知らない。しかし私は、私たちの「生命」という観点から、この「三世」ということを考えるとき、次のようなことがいえるのではないか、と思うのである。

つまり、「現在世」という中間的世界に生きる私たちの生命は、限りなく遠い「過去世」における私たちの先祖の「生命」から由来したものであり、私たちの「生命」はまた、限りなく遙かな「未来世」に生きるであろう私たちの子孫へと端的に受け継がれていくものである。しかし現代に生きる私たちは、非常に思い上った自分勝手な者たちであるので、この「過去―現在―未来」という時間的系列を全く無視して、自分たちさえよければよいという、「現在世」中心のハエゴイズムV的なものの見方・考え方・生き方にすっかりとらわれているのである。

このように、「現在世」という中間的世界に生きる私たちの「生命」は、「過去世」から「現在世」を経て、「未来世」へと連続として連続しているものなのであり、更にまた「現在世」に生きる私たちの生命は、同じく現在世に生きる「生きとし生けるもの」のそれと、一味のぶつ続きのかかわりの中にあるということ忘れてはならないのである。換言するなら、私たちの生命は時間的には、過去から現在を経て未来への連続性の中にあると同時に、空間的にはまた、生きとし生けるものの生命と連帯性の中にあるということ、こうした連続性と連帯性ということが、私たちの「生命」ということからみた「三世」ということの意味なのではないか、と考えるのである。

佛教においては、「天地とわれと同根、万物とわれと一体」ということがいわれるが、前者の「天地同根」とは、私

たちの生命の時間的・連続性を、「万物一体」とは、私たちの生命の空間的・連帯性を物語るものといえよう。その点、自分中心的なエゴイステイックな生き方は、このような生命の連続性と連帯性を徹底的に破壊するものなので、自分に対する嫌悪観を増大させると同時に、それが生きる喜びや元気を失わせるということを、ここでもう一度確認しておきたいと考える。

以上において私たちは、この宇宙における人間の位置づけが、時間的にも空間的にも「中間的存在者」であるというこの意味を追跡してきた。これが、人間本来のもともとのあり方なのであるということを。ところが近代において生じたところの「人間主義」―それはまた戦後半世紀のわが国においても横行しているものであるが―は、この「中間的存在者」という人間本来のあり方を徹底的に否定するものであったので、そこから \wedge ニヒリズム \vee や \wedge エゴイズム \vee による、人間の非人間化の深刻な問題が招来されたのである。とするなら私たちは、今こそ、この「中間的存在者」というあり方をしている人間の本性が、「中間性」であるということを改めて想起して、人間としての「謙虚さ」を取戻すと同時に、また「間柄」に生きることの大切さを確認することが極めて大事であろう、と考えるのである。それでは、人間性が「中間性」であるとは、どういうことなのであろうか。このことを次節において考えてみたい。

(Ⅲ) 「中間性」としての人間性ということ

人間の本来のあり方が、「中間的存在者」であるということとはすでにみた。とするなら人間性もまた、こうしたあり方に即して「中間性」であるといえることなのではなからうか。それについては、次のような二つのことが考えられなくてはなるまい。その一つは、「中」に主きをおいた「中間性」ということであり、いま一つは、「間」に主きをおいた「中間性」ということである。その場合、前者の「中間性」とは、「人間よ思い上げるな!」「人間よ謙虚であれ!」

ということを教えるものなのに対して、後者の「中間性」とは「間柄」に生きることの大切さを改めて教えるものといえよう。それでは、前者の「中間性」ということから考えていこう。

この「中間性」ということについては、端的にいつて、次のようなことが考えられなくてはなるまい。

- ① 中途半端性ということ
- ② 不完全性ということ
- ③ 不安定性ということ
- ④ 二面性ということ

こうした「中間性」ということを考えることによって、私たちは、すでに指摘しておいたような人間主義に内包されるところの人間の傲慢性を徹底的に反省することが大事であろう。

① 中途半端性ということ

人間が神と動物との中間に位する「中間的存在者」であるということは、直截的にいつて、人間性が「中途半端なもの」ということを端的に知らせるものである。何故なら人間は、「中間的存在者」として、神でもない、さりとて単なる動物でもないという二重の否定性においてあるものだからである。また人間が、「過去世、現在世、未来世」という三世の中の「現在世」に生きるものであるということも、人間が「中途」にあるものということを意味している。人間は現存世という「中途」にあるものとして、過去の恩を背負うと共に未来に対する責任があるということをしつかりとふまえておかなくてはならないのである。ともあれ人間性の複雑多岐な性質は、まさしくこの「中間性」ということから生じるものである。人間は時として、他者のために自己犠牲をも厭わないという崇高な人間性を示すかと思えば、時には、野獣にも劣るような残忍性や野蛮性を示すものなのである。このような全く相反する矛盾性

が人間性に内在しているということは、何よりも人間性が「中途半端なもの」といえるからではなからうか。

また人間は、「形而上的動物」ともいわれるように、「真・善・美・聖」などという高い価値や理念などを追い求めずにはいられない神聖性を示すかと思えば、他方ではまた空海のいうような「異生羝羊心」にとらわれて、雄の羊が餌や雌を求めてあくせくと生きるように、グルメやセックスを追い求めてただただ動物的な俗悪な生き方に汲々とするものなのでもある。こうしたこともまた、人間性が「中途半端なもの」であるということを端的に物語るものであろう。

更・に・い・う・な・ら、人間は人間として当然しなければならぬことが、なかなか実行できなかったり、反対に、人間として・は・な・ら・な・い・こ・とはしばしばしてしまうものである。認識と実践のずれといえようが、こうした問題もまた、人間性の「中途半端性」ということを端的に物語るものであろう。

すでに指摘しておいたように、現代に生きる私たちはこの上なく傲慢な存在であり、私たちは宇宙の主人公であり、自然の支配者であると堅く信じて少しも疑わない。しかも、このような人間の「高慢さ」が、逆に却って、人間の非人間化を招くところの「 \wedge ニヒリズム \vee 」や「 \wedge エゴイズム \vee 」の社会的風潮を横溢させているということを反省するとき、人間（性）が中途半端なものであるということを想起することは、人間が再び謙虚さを取り戻して、人間本来の中間的存在者の立場に立ち帰らせることにとつてまことに意義深いことなのではないか、と考えるのである。

② 不完全性ということ

中間性ということの二つ目の意味は、「不完全性」ということであろう。それは人間が、「死」への存在として有限な存在（それは人間が自然の束縛下にあるということの意味するものである。）であるにも拘らず、人間には動物とは異つて、自然の束縛をある程度は超えることのできる「自由」や「理性」が与えられているというアイロニクな

事実によ来するといえよう。しかもこのことが、人間性をまさに不完全なものとしているのである。つまり、

有限性＋自由＝不完全な自由

有限性＋理性＝不完全な理性

にならざるをえないという悲・哀・的・事・実・に・起・因・する・という・こと・な・の・で・あ・る・。

人間が、歴史や文明や文化などを創出したということは、人間には自然の束縛をある程度は超えることのできる自由や理性が与えられている、ということを経するものであろう。しかし人間が、この不完全な自由と理性を使つて歴史や文明（文化）を創り出したということは、人間が創成したところの歴史や文明には光の面があると同時に、闇の面も不可避的につきまといつて離れないということの意味していよう。しかも現代においては、闇の面の方が次第に顕著になりつつあるのではないかと深く憂うのである。自然の破壊や汚染、宗教的対立や民族的紛争、人間性の限らない墮落と俗悪化など。こうしたことが少しでも解決されないとすれば、二十一世紀は何か暗澹たる世紀になるのではないかと大いに心配される。

③不安定性ということ

中間性ということの三つ目の意味は、「不安定性」ということであらう。というのも「中」とは、「上—中—下」の中ということであり、それはまた「宙に浮いた」という不安定な状態をイメージさせるからである。その場合、この「中」という不安定な状態に生きるということは、私たちにとっては限りない不安感を抱かせるものとして、とても我慢のならないことであらう。そこで私たちは、自らを安定化させようとして、二つの方向性へと向けた生き方をするのである。その一つは、自らを「神佛」の方向へと向けて、自身を限りなく高めるといふ生き方であり、いま一つは、自らを「本能的欲望」（動物性）の赴くままに、自らを墮落させるという生き方なのである。その場合、前者が善

なる生・き・方といえるのに対して、後者が悪・し・き・生・き・方となるということを、私たちは決して忘れてはならない。

佛教においては、「上求菩薩、下化衆生」ということがいわれるが、これは「みんな一諸に佛性の実現をめざして高く生きよう」というスローガンであろう。私たちは、本当の意味における「自己実現」（それは佛性の実現ということである。）をめざして、自身をどこまでも神佛の方向にと向けて高めるように生きなくてはならないのである。

しかるに現代の社会には、あまりにも欲望的、本能的自我の生き方が横溢していて、空海という異生羝羊心ばかりが強く刺激されているのではないか、と大いに憂うるのである。現代に生きる私たちは、人間性を喪失すると同時に、むしろ動物（性）という状態に堕ちて自身を安定させようとしているのではないか、と深く反省するのである。

また私たちが、中間的世界という「現在世」に生きているということも、死後の世界である「未来世」とのかかわりにおいて限らない不安感を抱かせることであろう。そうしたことが現在世の生き方にも反映して確固とした生き方ができなくなるのであり、不安感のつきまとう不安定な生き方とならざるをえないのである。

④二面性ということ

中間性ということの四つ目の意味は、「二面性」ということであろう。その一つは「表層意識と深層意識」のそれであり、いま一つは「左脳と右脳」のそれである。それでは前者の問題から考えていこう。

①表層意識と深層意識

唯識佛教においては、八識説ということがいわれる。「眼識、耳識、鼻識、舌識、身識」という前五識（いわゆる五官といわれるもの）と、「意識」とが表層意識とされるのに対して、深層意識としては、「末那識と阿頼耶識」があるというのである。△エゴイズム△とのかかわりからいえば、これらの八識のうち最も注意しなくてはならない曲者は、何んといっても「末耶識」であろう。というのも、それは、いつも「自分」という存在に執着して、いつでも「自分」の

ことしか考えないので「思量識」ともいわれるものだからである。とするなら、それは、自分中心的な我利我利亡者の生き方をさせる元凶であるといえよう。(現代の日本には、このような生き方をする者が如何に多いことか。)しかもそれは、無意識のうちに、いつでも自分が得をするように、自分が損をしないようにと考えているのでまことに仕末の悪いものなのである。表層意識では善ということが分かつていても、それが実行できなかったり、逆に、悪いということが分かつていてもついついそれをしてしまうというのも、この「未耶識」のなせるわざであるといえよう。こうしたことから「未耶識」は、却って、自分に対する嫌悪感を抱かせるものなのであり、それが時には他者に対するいじめや攻撃となったり、自分に向けられる時には自殺となったりするのである。とするなら、この未耶識のコントロールということが、何よりも我儘勝手な生き方や、自分に対する嫌悪感を鎮めるためにも必須不可欠となろう。そのためには、他者に対する愛行の実践(例えば、ボランティア活動など)を通して、「自分をほめてやりたい」というような生き方をするのが大事となるのである。自分に執着し、自分に対してのみ向けられる眼を他者に向けると同時に、進んで他者に対する慈悲行を実践すること、こうしたことが未耶識をコントロールするための最大のきめ手となるのである。それかあらぬか唯識佛教においても、未耶識を転じて「平等性智」(自分にとらわれて、自他の差別をすることなく、自他共に平等であるとする智慧のこと)を得ることの大切さが力説されていた所以である。

◎左脳と右脳

「中間的存在者」としての人間の脳は、実に二つの部分から成るといわれる。つまり左脳と右脳とである。そのうち、前者の左脳は主として言語をつかさどり、論理的な機能を営むものといわれるのに対して、後者の右脳とは、直観やイメージ、想像などを生むところの非論理的機能を営むものであるといわれる。換言するなら、左脳は分別的能力にかかわるものなのに対して、右脳は無分別的能力にかかわるものといえよう。

分別的能力とは、すべてのものを「主観―客観」、「自分―他人」という二元対立の枠組みの中においてみようとすること能力のことをいう。そのためには前提として、自我の成立と、自我意識の存立とが必要不可欠となろう。デカルトは、「われ思う、故にわれあり」と語っていたが、「われあり」とする自我存在の確立と、「われ思う」という自我意識の確立ということである。しかも忘れてならないことは、そのことが、「われはわれである」という同一律的自我のあり方を意識させるということなのである。左脳が言語をつかさどり、論理的な機能を営むということの核心は、まさしく、この同一律的自我の確立ということにあるといえよう。というのも言語と論理的な機能の中核とは、実に形式論理の形成ということにあるからである。ところで、この形式論理とは、次のような三つの要素から成る論理のことをいう。

AはAである。(同一律)

Aは非Aではない。(矛盾律)

Aでも非Aでもないものはない。(排中律)

しかも、この三つの論理のうち、その中心となるものは「AはAである」という同一律であり、他の二つはそれを補完するものである。とするなら、左脳の働きの中で最も中心的なものは、この同一律的思考をする自我の確立にあるといっても決して過言ではあるまい。しかもまた、この「自分は自分である」とする同一律的自我の成立が、唯識佛教における「末那識」とも深く関連していることを考えるとき、現代における左脳中心の文化や教育のあり方は、人間の非人間化をもたらすところの「エゴイズム」という深刻な問題を招いている元凶なのではないか、と深く憂うるのである。

これに対して右脳は、直観やイメージ、想像などを生むところの非論理的機能を営むものとして、無分別的能力に

かわるものということを考えるとき、二十一世紀はこの右脳の教育を活発化して、分別的自我のあり方をコントロールし、無分別的自我のあり方を強化することが大事となろう。つまり、「自分は自分である」という同一的自我のあり方に対して、更に次のような超同一律的自我のあり方を附加することが大切なのではないか、と考えるのである。

「 \wedge 自分は自分である \vee とは、自分を自分とする者によって、自分が自分とされているからである。」

「 $\wedge A$ はAである \vee とは、AをAとするものによって、AがAとされているからである。」

このような形式的論理を超えるものの見方、考え方を附加することが、 \wedge ニヒリズム \vee や \wedge エゴイズム \vee の生き方を克服することにとって、この上ない重大事となろうと考えるのである。

現代は情報化社会であり、このような社会においては左脳ばかりが肥大化されるであろうということを考えるとき、右脳の育成こそが、分別的同一律的なものの見方、考え方を克服することにとって、また情報化社会への対応のためにも緊急不可欠の課題となろう、と考えるのである。そうでなければ二十一世紀は、左脳の専横により人間性が徹底的に破壊される暗澹たる世紀となるのではないか、と深く憂うるのである。

それでは次に、人間性が「間」に主きをおいたところの「中間性」でもあるということの意味を考えるとしよう。

それは、「間柄」に生きるところの人間（性）ということなのであるが、その間柄はまことに複雑多岐でもあるので節を改めて論じることにはしたい。

(Ⅳ) 「中間性」としての人間性ということ

「間柄」に生きる人間（性）というとき、そこにはどのような間柄があるであろうか。端的に言って、そこには次のような間柄があると思われる。

- ① 「大いなるもの」との間柄
- ② 「自然」との間柄
- ③ 「日本国」との間柄
- ④ 「社会」との間柄
- ⑤ 「他者」との間柄
- ⑥ 「自身」との間柄

それでは、これらの「間柄」について順次に考えていくとしよう。

① 「大いなるもの」との間柄ということ

現代は、神佛というような「大いなるもの」という存在が、全く忘却されている時代である。現代は科学万能主義の世の中であり、このような時代においては、すべてのものを客観的、対象的につかまえようとするものの見方、考え方が支配的である。例えば、ものが実在するとは測定しうるということであるとする測定主義とか、物質を分析して最少単位である分子とか原子とか素粒子などを取り出し、それを素にしてもとの物質を再構成するという還元主義などは、その典型といえよう。このように科学万能主義の下においては、量的に測定しうるということ、つまり測り知ることができるということが、何にも増して大事にされるのである。

ところで、万象を万象たらしめているもの、また私たち人間を人間たらしめている「大いなるもの」という存在は、もともと測り知ることのできないものであろう。それ故に、このような存在は科学万能主義の世の中においては、頭から否定されざるをえないのである。無神論とか、「大いなるもの」に対する無関心というような時代風潮が風靡せざるをえない所以である。それではこうしたことによって、別段何んらの支障もないのであろうか。否！決してそうで

はあるまい。そこには \wedge ニヒリズム \vee とか \wedge エゴイズム \vee という、人間を非人間化するところの極めて深刻な問題が生じているからである。それはまさしく人間が、神佛というような「大いなるもの」という存在を見失うとき、人間性を喪失せざるをえないというアイロニーを物語るものであろう。この問題については、すでに(I)の「 \wedge ニヒリズム \vee と \wedge エゴイズム \vee における非人間化の問題」において詳しく論じておいた通りである。それでは、このような問題を克服するためにはどうすればよいのであろうか。そのためには、この「大いなるもの」という存在の生々とした存在感を感得することが大事となろう。

莊子は、「物を物たらしめるものは、物に非ざるなり」(「物物者之非物也」、福永光司「莊子」外篇、在宥篇第十一、一三〇頁)という。「物に非ず」という目には見えないものの、形のないものが、物を物たらしめているというのである。

また古諺に、「火は火を焼かず、水は水を流さず」といわれる。これは一体、どのようなことを物語るものなのであろうか。火を例にして、その意味を少しく考えてみよう。

火はその性質として、あらゆる一切のものを焼きつくす。しかし火は、火自身を焼きつくすということは決してありえない。というのも、もし火が火自身を焼いてしまうとすれば、それはもはや火ではありえなくなってしまうからである。とするなら、火が火であるというのは、火がまさに火ではない何者かによって、つまり火を火とする者によって火は火でありうるのであるといえよう。それは水についても同様である。この厳粛な事実、まさしく、万象のあり方の根源を端的に物語るものであろう。

とするなら、私たち人間についても、人間を人間たらしめるものは、人間に非ずというものによって、つまり「佛」(この文字は、人偏に弗と表記されていることに注意されたい。)によってであるということになろう。とするとき、このような目にも見えない、また形もない「大いなるもの」という存在について、その生々とした存在性を感性的に実に見事に

謳いあげているのは、次にみるような二首の歌ではないか、と思われる。

なにごとのおわしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる（西行）

大いなるものに抱かれあることを

今朝吹く風の涼しさに知る（山田無文）

前者の西行の歌は、彼が伊勢の皇太神宮を参詣した折の歌であるといわれる。皇太神宮のあの神域がকাশし出す何んともいえない神々しい雰囲気にかたれて、感涙にむせんでいる西行の姿がありありと伝わってくるようではないか。このように、「大いなるもの」という存在の気配をぢかに感得する力がこの上もなく大事なのである。しかし、現代人には、このような力が大きく欠けているのではないかと深く憂うるのである。

また後者の山田無文老師（彼は、現代日本の傑僧の一人といわれた。）の歌は、彼が肺結核を患って自宅療養をしていた時、ある朝、非常に気分がよかったので縁側に出て庭を眺めていた折に詠まれた歌であるという。一陣の風がサツと彼の頬をなでて通り過ぎていった時、この風という「大いなるもの」によって今日まで生かされてきた自分の姿に改めて開眼して、その驚きの思いを詠まれたのが、この歌であるというのである。生かされてある自分の姿の再発見、そこにこそ、宗教的自覚の道が開かれているといえよう。

以上においてみてきたように、形もなければ目にも見えないところの「大いなるもの」という存在は、確かに対象的、測定的にはつかまえられえないとしても、その働きや存在性を感得するということに即して、つかまえられるのではないかと考えるのである。ともあれ、△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽による非人間化という、まことに深刻な問題が横溢している今日、このような問題を解決するためには、何よりも先ず、この「大いなるもの」という存在

のいきいきとした存在性や働きなどをしっかりと感得して、それとの間柄を真摯に生きるということが、この上なく大事となろうと考えるのである。

②「自然」との間柄ということ

自然は「母なる自然」であり、人間は「自然の子」であるといわれる。とするとき、自然の破壊や汚染をここまで深刻化させた現代人は、「母なる自然」に対して全く手のつけられない放蕩息子、道楽娘といえることなのではなからうか。何にしろ、瀕死の母の枕頭から、毎日、小遣いをせびり取っていくという親不孝ぶりだからである。（自然からの搾取ということ。）

近代は、すでに指摘しておいたように、「神」を追放してその後釜に人間を据え、更にこの人間をして自然の主人公たらしめた。そこから近代は、自然を支配し征服することは善であるとする近代的価値観を形成し、自然支配、自然征服を正当化したのである。近代において形成された、このような自然支配、自然搾取の自然観が、今日における自然破壊や汚染の元凶であるということ、私たちは決して忘れてはならない。とするなら、今日に生きる私たちは、「母なる自然」に対する親不孝ぶりを心底から悔いて、母に対して孝養をつくすことがこの上なく大事となろう。

ところで自然には、大きく分けて二つの意味があると思われる。その一つは人間の「外なる自然」ということ。つまり自然環境 (nature) のことであり、いま一つは「人間の内なる自然」、つまり“human nature”としての「人間性」のことである。このように、人間の「外なる自然」と、人間の「内なる自然」とは密接に対応しているのである。したがって「外なる自然」を破壊することは、「内なる自然」、つまり「人間性」をも徹底的に破壊するということ。こうしたことを、私たちは心の中にしっかりと銘記しておかなくてはならないのである。

ところで、人間が「人間となること」にとって最も大事なことは、「内なる自然」の中の美しい人間性、つまり「佛

性」をどのようにして実現するかということ、またその醜い人間性である「自我」をどのようにしてコントロールするかということであろう。しかるに、近代における「内なる自然」観、つまり人間性に対する考え方においては、自我的欲望は無害であり、むしろ自我的欲望の拡大は善であるとすら考えられたことにより、資本主義の発達につれて大量生産・大量消費の生活のあり方が序々に可能になると同時に、それを強く推進してきたのである。しかもそのことが、今日においてみるような「外なる自然」の破壊・汚染という極めて深刻な大問題を結果していたのである。結局のところ、欲望充足の大量生産・大量消費の生き方は、地球上の資源を枯渇させつつあるにも拘らず、他方では、大量廃棄によってゴミの山を築くという、全く矛盾したシリアスな状況を招いていたのであった。こうしたことが、また、自然の生態系を大きく崩しつつあると同時に、それが更にひる返っては、私たちの生体にも甚大な影響を及ぼしつつあるということを、私たちは決して忘れてはならない。

とするなら私たちは、今こそ、「知足」ということによつて、「内なる自然」の欲望的自我をコントロールすることが極めて大事なことになる。というのも、すでにみたように、この欲望的自我の欲求充足の生き方は、まさしく「外なる自然」を破壊するだけではなく、更に欲望には限度がないので必然的に欲求不満という「求不得苦」（求めても得ることのできない苦しみということの中に、人々を突き落とすからである。そこから私たちの心の中にはイライラの不満心理やルサンチマンなどがうつ積せざるをえず、それが往々にして他者に対するいじめや殺人にとエスカレートするのである。それはまた、自分に向けられてはしばしば自殺や自傷などの自虐現象として爆発せざるをえないのである。それ故にこそ、今日においては、「内なる自然」の欲望的自我をコントロールして、「足ることを知る」という禁欲的な生き方をするのが、緊急不可欠の重大事となるのである。このことなくしては、「外なる自然」との共存・共生の関係を築くことは全く不可能であるといえよう。そのためには、私たちの生活水準を^{あえて}レベル・ダウンさせるとい

うことも覚悟しなくてはならない時期が来ているのである。

現代の科学・技術文明が自然の破壊や汚染を推進し、人類を含めた「生きとし生けるもの」の生存を危うくしている今日、私たちは再び人間の「外なる自然」と、人間の「内なる自然」との調和をめざす、「調和の自然観」（『有機的自然観』）を復活させることが何よりも大事となろうと考えるのである。自然は「母なる自然」であり、人間は「自然の子」であるということを想起して、母なる自然の懷の中に抱かれて平和に安心して生きる人間の姿を理想として生きてはならないのである。そうでなくては、二十一世紀は「外なる自然」の破壊や汚染により、全く暗澹たる時代となるであろうことは目にみえている。

③ 社会との間柄ということ

人間が「自然の子」であつたように、人間はまた「社会の子」でもあるということが想起されなくてはならない。社会の一員として、社会の中で人間となつていくということの意味をしつかりと噛みしめなくてはならないのである。人間は狼に育てられると狼になるといわれる。人間とは、まことに大きな可塑性をもつものである。とするなら人間は、人間の社会の中でしか人間になりえないということの意味を、十二分に認識する必要がある。しかし現代は資本主義社会の時代であり、その中に生きる私たちは、人間としてよりは、むしろ「経済的動物」^{イコノミック・アニマル}としての生き方を余儀なくされているといえよう。人間となるための社会が、逆に、経済的動物になるための社会となつていっては、これ以上のアイロニックな矛盾した現象はないであろう。その原因は、端的にいつて現代の社会が、お金中心の利益社会であるということに起因していると思われる。

周知のように、私たち人間の社会は、「^{グマインシャフト}共同社会」から「^{ゲゼルシャフト}利益社会」へと推移したといわれる。共同社会とは、単純化していえば、地縁、血縁、知縁という、いわゆる三つの「チ」によつて成り立つところの社会をいう。つまりそれ

は、同一地域という地縁関係、血のつながりがあるという血縁関係、また互いに知り合いであるという知縁関係の人々によって形成される社会のことである。ということとは、そのモデルはまさしく村落社会のことに他なるまい。しかもそこでは、年長者たちによって、人間が人間となるためのあり方や生き方がしっかりと教えられていたのであり、また文化の伝承も確実になされていたのである。しかし近代は、このような社会を崩壊させると共に、利益社会という新たな社会を出現させたのである。

利益社会とは、単純化していえば、お金を媒介として成り立つ契約社会のことであるといえよう。その典型は株式会社といえようが、このような契約社会のあり方は、現代においては家庭、学校、地域社会、国家、国際社会へと広く及んでいるのである。しかもそこでは、人生の目的はお金だとする拝金主義や、また経済優先の金儲け主義などが跳梁跋扈しているのである。これでは人間を人間とする社会であるどころか、異生羝羊心の横溢する経済的動物にさせられてしまうのも止むをえないことであろう。

お金の追求に現をぬかす現代の日本人をみると、私はなぜか中学生の頃、英語の副読本で習った「キング・マイダス」の話を思い出す。マイダス王は金を手に入れたいと願う。出来れば手にふれるものがすべて金になればよいと願う。その熱い願いにほだされて、神様はその願いを聞き届けて下さった。

ある日のこと、彼が最も愛していた孫娘が「おじい様！」といって彼の部屋に入ってきた。彼は思わず「姫よ！」といって孫娘を抱くと、姫は金の像になってしまった。それに驚き悲しんだマイダス王は、神に再び金の像の姫をどうかものと姫にして下さい、と哀願した。その哀しい願いを再び聞き入れて下さった神様は、金の像の姫を再びもとの生身の姫にもどすと同時に、マイダス王から手にするものがすべて金に代わるといふ魔力をも奪ってしまったという話である。

この話は、この人生はお金だけが目的ではないということを、最も赤裸々に教示するものであろう。であるのに、今日の利益社会はお金万能の拝金主義を人々の心の中に徹底的に植えつけているのである。このことによって人間性が如何に破壊されるかということは、日々のマスコミが報じる諸々の事件や現象によっても明らかであろう。戦後の半世紀、この日本においては、あらゆる方面において利益社会化が進行しているのであるが、その中でも最も悲劇的なのは、三世代同居型の共同社会的な家族のあり方が崩壊して、核家族という利益社会化した家族のあり方が定着してしまったということであろう。このことによって、祖父母たちによる文化の伝達が途絶えてしまったということ、また子供たちに対する躾や家庭教育が衰えてしまったということ等々が、今日のわが国における青少年問題の元凶であるということ、私たちは徹底的に反省しなくてはならないのである。まことに困難なことかもしれないが、一度、家族のあり方を共同社会的な三世代同居型の家族のあり方に戻すということが、今日における青少年問題や教育の混乱を根本的に克服する最もよい手立となりうるのではないかと期待するのである。

更にまた、利益社会化している学校のあり方（それは、受験・体制・教育というあり方に具現化されている）を再び共同社会的な「学び舎」としてのそれに戻すということが大事となろう。そして「一即一切、一切即一」（ひとりとはみんなのために、みんなはひとりのために）というような人間関係を樹立して、教師と児童・生徒との間に単なる知識伝達のための教化の教育ではなく、人格のふれ合いによる感化の教育の行なわれることが切望されるのである。ともあれ、このような教育の確立なくしては、本当の教育の再生は決してありえないであろう。

加えてまた、利益社会化されたところの地域社会のあり方を、少しでも共同社会のそれにと近づけるために、そのための努力をすることが大事であろう。例えば、自分が住む地域社会の「地縁」としての連帯性を高めるために、地域社会に特有の珍らしい風習や伝統文化や芸能などを足掛りとして、何らかの「地域おこし運動」をしてみるとか、「ボラ

ンティア活動の展開」などを通して、人々が互いに「知縁」を得ることが重要なのではないか、と考えるのである。

私は、まことに突飛なことにも、こんなことを夢想する。それは四国を日本人の心の故郷ふるさととして、あの八十八カ所を遍路のための新しい共同社会にしたらどうか、ということである。私たちが、利益社会の中でサラリーマンの生活に疲れた時、その生活に疑問をもった時、長期休暇をとって遍路の旅に出るのである。そして、この旅を通して、利益社会の中で溜った「異生牴羊心の垢」を洗い落とすのである。今年、サラリーマンの自殺者が極めて多かったため、日本の男性の平均寿命が縮ったという報道を聞いて、まことに大きなショックを受けたが、利益社会に対する防衛姿勢をしっかりともっていないと、私たちもいつ利益社会の犠牲者となるかもしれないのである。

とるとき私たちは、人間が人間となることにとっては、何んとしても共同社会的な社会のあり方がより重要であるということを確認して、そのための努力を積極的にすることがこの上なく大事となろうと考えるのである。このような努力をすることなくして、利益社会の横暴と跳梁を許すならば、二十一世紀はまことに暗澹たる危機の時代となるろう。

④日本国との間柄について

周知のように、戦時中における私たちの生き方は「滅私奉公」のそれが強制された。「私」の一切を捧げて「国」のために尽すということが強要されたのである。それに対して、敗戦後のわが国においては「滅私奉公」の生き方とは全く逆の、「国や公」は「私」という存在のためにこそあると考える「滅公奉私」の生き方が跋扈している。しかもこれに、戦後の民主主義に対する誤解（民主主義とは、個人を尊重するということであり、それは自分勝手に生きてもよいということだ、というような誤認）も加わって、「滅公奉私」の生き方がすっかり定着しているのである。今日における私たち日本人の生き方は、自分の欲望充足、自分の生活くらしの充実のみに明け暮れていて、日本国の将来に関して真剣に考えている者

はまことに少ないのではないか、と憂うのである。戦後の日本人は、「国や公」から何かをされることばかりを期待していて、「国や公」に対して何をなすべきかということをも全く考えない、いわゆる「受容指向型」の人間たちで満ち溢れているということを、痛烈に反省しなくてはならないのである。

「忘国の民は亡国の民となる」といわれる。もともと今日の日本は、すでにアメリカの日本州であるといえなくもないが、だとすれば猶更のこと、私たちは日本の真の独立を願って、日本の再生のために大いに努力しなくてはならないであろう。その場合、その努力目標となるのは「奉私奉公」という新しい生き方なのではないか、と思われる。というのも戦時中における「滅私奉公」の生き方も、また敗戦後における「滅公奉私」の生き方も共に虚妄の生き方であると断ぜざるをえないからである。それでは「奉私奉公」の生き方とは、一体どのような生き方のことをいうのであろうか。

「奉私」とは、「私」を大事にするということであるが、それは単なる「欲望的自我」を大事にするということでは決していない。「知足」ということが真剣に考えられなくてはならない今日、欲望的自我はコントロールの対象でしかない。それでは、どのような「私」を大事にすることなのであろうか。

「私」という存在は、端的にいって、「欲望的自我としての私」と、この「私」を超えたもう一人の「一無位の真人としてのわたし」という二人連れであるといえよう。（臨済禅師は、そのところを、臨済録の中で「赤肉団上に一無位の真人あり」と語られている。）とするなら、この「赤肉団としての私」（＝自分）が、「真人（佛性）」としてのわたし」（＝自己）になるということが、「奉私」ということの本当の意味に他なるまい。換言するなら、「私＝自分」が「わたし＝自己」を実現するということが、つまり「自己実現」ということなのである。しかも、このような生き方をするのがまた、「奉公」ということにもつながらなくてはならないのである。

「奉公」とは、「国や公」のために「私」を忘れて尽力する生き方のことをいう。それは決して強制されてするというのではなく、自ら進んで「国や公」のために何を為すべきか、何をしうるか、という自発的な積極的な生き方のことをいうのである。

とするなら「奉私奉公」の生き方とは、自らの「佛性」を自覚するところの生き方が、他方ではまた、この日本に「佛国土」を建設しようとする生き方とならなければならないということなのである。このような「奉私奉公」の生き方が、「滅公奉私」という欲望的自我の跳梁跋扈する今日、緊急不可欠の重要課題として要請されていようと痛感するのである。

私たちは、日本が単なる経済大国としてではなく、「佛国土としての精神的共同体」でもあるという理想を実現することが、「世間虚仮、唯佛是真」という理念を古代において示された聖徳太子の御遺志に最もよく添うものなのではないか、と切に考えるのである。

⑤他者との間柄ということ

他者との間柄という場合、私たちの常識においては、先ず自分という存在がいて、この自分が自分の趣味嗜好に従って他者を取捨選択することにより、そこに他者との間柄が形成されるところを考えているのではなからうか。つまり個がまず先だと考えているのである。だが、果してそうだろうか。すでに指摘しておいたように、私たちは「社会の子」であつた。ということは、私たちは「社会とのかかわりにおける私」というあり方をしていといえよう。それは具體的には「他者とのかかわりにおける私」ということなのである。この「私」が、いま、ここにいるのは、直接的には「両親」とのかかわりにおいてであるということを考えるならば、このことがよく理解されるであらう。つまり「私」という存在が先にあるのではなく、「かかわり」が、つまり「関係」が先にあるということなのである。その辺のこと

を、私は、マルチン・ブーバーの所説も念頭に入れて、「自分―他分」、「自己―他己」という二通りの人間関係を考えておきたいと思う。

現代は資本主義社会（それは典型的な利益社会である）の時代であり、その中に生きる私たちは利潤やお金追求に振り廻わされている。したがってその中に生きる私たちの人間関係は、必然的にお金を媒介とする利害関係のそれとならざるをえないであろう。そこに成立する人間関係が「自分―他分」という人間関係なのである。つまり、利潤追求のかかわりが生み出すところの人間関係といえよう。ところで「自分」という存在は、文字通りに、「自らを他から分けることにおいて成立するもの」として、それは基本的には、「他者」との間柄を拒否するものである。というのも、それは自我存在として、自分にあくまでも執着し、自分にこだわるものだからである。また「他分」とは、他者の中におけるこのような自我存在そのものを意味している。とするなら、この自我存在同士の者たちはもともととは決して結び合うものではなく、ただ功利関係においてのみ結びつくものなのである。利益のある時には結びつくが、利益のない時にはそっぽを向いてしまうものなのである。「自分―他分」という人間関係は、まさしく資本主義社会のあり方を反映するところの非人間的な非情な人間関係であるといえよう。

これに対して、「自己―他己」という人間関係は、人格的関係のそれとしてまさしく共同社会におけるそれを反映するものといえよう。それでは、「自己」とか「他己」とかという存在は、どのような存在なのであるか。自己の「自」とは、「我」とか「私」ということであり、「己」とは、「おのれ」とか「わたし」ということであり。とするなら「自己」とは、「私のわたし」ということになる。また「他己」（道元禪師が正法眼蔵の「現成公案」の中で使われている言葉）とは、「他者のわたし」ということであろう。それを更に拡大するなら、「あなたのわたし」、「彼のわたし」、「彼女のわたし」という具合に、「生きとし生けるもののわたし」にまで広がりうることであろう。とするなら「自己―他己」と

いう人間関係は、「わたし」という存在が共通することによって成り立つところのか・か・わ・りであるといえよう。私は、その具体的な例を四国の霊場を遍路する、あのお遍路さんたちの姿にみる思いがするのである。

お遍路さんたちは、「同行二人」と書かれた網代笠をかぶって八十八カ所の霊場を旅するという。それは弘法大師との二人連れということなのであるが、この弘法大師という偉大なる存在が、すべてのお遍路さんには共通しているのである。また、お遍路さんを接待する土地の人々にも共通していて、これらの人々を広く結びつけているのである。弘法大師を中核として成り立つ遍路の「精神的共同体」、そこに私は、「自己―他己」という人間関係のあり方を具体的にみる思いがするのである。その場合、「己」とは直截的には弘法大師のことなのであるが、この「己」とは臨濟禅師のいわれる「一無位の真人」とも、「佛性」とも「佛」ともいいうるものなのである。とするなら「自己」とは、「私と佛とのかかわりにおいて成り立つもの」といえよう。「自己」とは、まさしく「私と佛」との同行二人ということに他なるまい。

以上において私たちは、「自分―他分」、「自己―他己」という二通りの人間関係のあり方のあることを考えてきた。そして「自分―他分」というかかわりが、利益社会のそれを反映するものなのに対して、「自己―他己」というかかわりが共同社会のそれを反映するものであることをみてきた。とするなら、このような二通りの人間関係が成り立つのも、「自己」という言葉の分析が示しているように、私たちがもともと「自分と自己」との二人連れ、「自己と他己」との同行二人であるからだといえよう。それでは、このような「二人連れ」、「同行二人」とはどのようなことをいうのであろうか。このことについては、すでに紙数も尽きてしまったので、他日、稿を改めて論じたいと考える。

おわりに

すでにみてきたように、人間本来のあり方が「中間的存在者」であるということは、私たちに対して、「人間よ謙虚であれ！」「人間よ、神佛という△大いなるもの▽へと向けて、自身を高めるように生きよ！」ということをも命じると同時に、また諸々との「間柄」に生きることの大事さを要請しているということ、こうしたことを端的に意味していたであろう。

ともあれ人間が、人間を超えた△大いなるもの▽という存在を忘却して「人間主義」に立脚するとき、そこからは必然的に△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽が招来されて、それが人間を非人間化すること、こうしたアイロニーを私たちは決して忘れてはならないのである。現代日本に横行する諸々のいまわしい事件や現象は、まさしく、こうしたことの端的な現われであろう。現代日本に生きる私たちに、生きる喜びや希望がないのは、経済的不況もさることながら、△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽の社会的風潮が横溢しているから、生きる力や元気が湧いてこないのである、といえよう。とするなら、このような時代においては、人間本来の位置づけが「中間的存在者」であるということを再び想起して、それに叶ったふさわしい生き方をするのが何にもまして緊急不可欠の重大事となろう。現代は、△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽を克服するために、私たちのひとりひとりが何をなすべきか、何ができるかということを引きしく問われなければならない時代であるということ、私たちは心の中にしっかりと銘記しておかなくてはなるまい。その場合、私は、「赤肉団上に一無位の真人あり」という臨済禅師の言葉を信じて、私の中の真人^{わたくし}、つまり佛性を自覚するということが、本当の意味における自尊心を得て、それが△ニヒリズム▽や△エゴイズム▽の克服につながるであろう、と確信して止まないものである。すべては、まさしく、そこから始まるであろうと思われる。

平成十一年十二月四日脱稿